

子どもは親の死をどのようにとらえるのか

- 大人とのかかわりの中で -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
井上 あき

比較的早い時期に親と死別した子どもにとって、その体験は大きな喪失感を与えるものになると考えられる。近年、日本人の死因の第一位を占めるガン医療の現場では、患者の年齢が30代・40代の場合、小さな子どもがいるケースが多い。親がガンなどの死に至る病気であることは、子どもにとって大きなストレス状態を生むことがあり、親の死という恐れや、家族機能の崩壊、家族間での感情的な苦悩を伴うことが多いため、特に考慮が必要である。しかしながら、そういった子どもの精神的ストレスを、必ずしも親が的確に把握しているとは限らないようである。また、子どもが親の病状や死を認識し、それに伴う自己の感情を認知・発散するためには、亡くなる親本人や、家族などの身近な大人のかかわりが重要な鍵になると言える。しかし大人の配慮や意向によって、病状や死に関する事実を伝えられない、あるいは患者である親と接する機会そのものが制限されることもある。

そこで本研究では、児童期以前に親との死別を経験した人を対象にインタビューを行い、死別前から死別後現在に至るまでの期間において、当時どのように親の病気や死を理解していたのかについて調査することとする。またこの際、身近な大人の言動や対応が子どもの理解や認識に影響を及ぼすと考えられるため、親や近親者などに対してもインタビューを実施し、子どもの体験と併せて検討する。今回の調査では、10数年前に父親を亡くした筆者の家族を一つの事例として取り上げ、子ども達と母親、母方の祖母を対象とし、筆者の体験を含めつつ、死別前から現在までに起きた出来事（エピソード）を想起する形で調査を行った。

調査の結果、この事例においては、状況の認識あるいは感情の共有の程度に関して、大人と子どもの間での差異が顕著であったことが明らかになった。このことは、死別前に子どもに対して病状に関する情報の共有がなされなかったこと、また死別後においても大人と子どもの間で亡くなった親に関する話がされていなかったことなどが影響していると考えられた。しかしながら一方で、子どもへの病名告知、臨終や死後の儀式への立ち会い・参加などが子どもの死の理解を促しており、また死後から現在までにおいて、当家族にとっての第三者的な他者の介入や、亡くなった親にまつわる物などによって、家族員の間で感情を共有する場が生じていると言えた。今回の事例におけるこれらの結果によって、家庭内で親の病気や死に際するとき、子どもは受身的な存在になりがちであること、また大人が子どもに対してどのようなかかわりを持つかによって、子どもが経験する死の理解やそれに伴う感情の認知・発散の程度が左右されること、そしてかかわりの内容によっては、幼い子どもであっても親の病気や死という現実を理解できることが示唆された。